二〇一七年度

D 国語問題

注意

一　試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
二　解答用紙はすべて**HBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシル**で記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）
三　この問題冊子は**16ページ**までとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は**一**～**三**となっています。
四　解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に**氏名**のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
五　解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
六　解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
七　この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

一　マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
二　一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
三　訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○ 1 ○ 2 ● 3 ○ 4 ○ 5

（3と解答する場合）

一　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（**解答**はすべて**解答用紙**に書くこと）

英語にbookishという形容詞がある。書物のような、ということは非現実的な、という意味で用いられるこの言葉は、それが由来する書物の存在を現実から切りはなし、その意義を現実との対比において否定している。書物の世界は現実的ではないのか。あるいは、現実的でないもののヒュ(イ)に書物が使われるとはどういうことなのか。

かつて書物といえば聖書のことを意味した時代があった――その名残りは、周知のように書誌bibliographyなどの言葉の接頭語がBibleに由来していることに見ることができよう。この聖書という唯一の書物には、世界についてのあらゆることが書き記され、人間の知はこの書物なくしてはありえず、この書物の世界を越えることもまたありえなかった。言いかえれば、知は書物とともに、書物と一致してあり、この二つのあいだには(1)いささかのすきまも存在しなかった。

われわれの時代にあっては、唯一の、(ロ)シコウの書物はもはやありえず、書物と知の世界との不一致は明らかであるように思われる。bookishという言葉の出現は、そういう時代を反映している。書物という言葉の形容詞化、さらにその形容詞によるもとの書物の存在の否定は、とりもなおさず、書物と知とのあいだにすきまの生じたことを前提としている。この語が近代英語の言葉であることはもちろんだが、それ以前の時代には、こうした形容詞は生まれようもなかったのである。

さて、このすきまから、ここでの主題である書物、近代的な書物――と、さしあたって呼んでおきたいのだが――が登場してくる。近代的書物とは、活字印刷でつくられ、商品としての資格があり、その読まれ方としては黙読されることが基本である、そのような書物、つまり今日われわれがふつうに呼ぶ書物のことである。その発展の過程とその性質とを考えてみたい。そこにはまた、近代的な知の特質を見ることもできるだろう。

その発展の過程の一つとして、集団的な口誦(しょう)から、書物の個人的な音読、さらには黙読というすじみちを想定することができる。書物と知とが一致した世界では、書物を《読む》ということは、おそらくありえなかったか、

あるいはきわめて限定されていた。読み手としての個人の概念そのものが明確には存在しなかった。一人の牧師が教壇に立って聖書を読み上げる。集まった人びとはそれに耳傾ける。公衆とは聴衆のことであった。[注1]『読む』のは共同社会的活動であり、読者は個人よりはむしろ集団的性格を帯びていたということができる。」

そうした聴衆の各人が個人として群れを離れて、書物を独りで、最初は音読、しだいに黙読のかたちで読みだすところから分化がはじまる。音読――それはかなり長くにわたって温存されたが――は、読者たる個人の意識に刻みこまれた、集団による口誦の様式の名残りであり、□の過渡的な形態である。

集団的な口誦から個人による読書への移行は、文字というメディアの役割を大前提としている。つまり、ここから書物のもつ画一性ということが問題になってくる。その点では、写本も活字本も変わるところはない。異なるのは、写本では同じ字体を用いても写字生によって多少の個人差のあったのが、活字本では機械のおかげでより正確な複製が可能になったということである。写字にせよ活字にせよ、もしもそこで用いられる字体が一定していなかったならば、表現、伝達、判読といったことはきわめて困難である。したがって、ある種の画一性が、書物の成立のための必要条件になるわけだが、このことは結果として、書物の内容である知識の同型性をもたらすことになる。

書物の発展は、これを書きあるいは読む人間については、集団からの個人の離脱――それは思想史的には《近代的な主体》の形成ということになろうが――を意味する、と同時に、書物の内容としては、知識の同型性、そしてまたその同型的なるものの多数性の発展をも意味している。言いかえるなら、近代的書物には、個性と公共性との同居を認めることができる。

集団から離れて独りで読書する個人は、他の個人もまた同じことを行なっているということを許さないわけにはゆかない。もっとも、書物の内容の同型であることは、それが読者に受け取られたときの同型性を必ずしも意味しない。どう読むか――それは読者の自由である。だが、知識が同型なものとして伝播されることを、書物の同型性が準備している、と考えることもできるのであり、読者の《自由》が小規模にとどまっている場合であれ

ばともかく、活字印刷によって大量に拡大されるならば、その傾向はそれだけ著しいものとなる。

(2) 書物によって集団から自立した個人が、その同じ書物を媒介として、目には見えない新たな集団を形成する。これが近代的書物の根本的な性格であり、逆に言えば、書物の発展と並行して形成された近代的な主体の根本的な性格でもあった。

だが、こうして新たに形成された集団が小規模なものである段階においては、書物はまだその内容としての知を(ハ)トウギョしえていた。そのような時代は、十八世紀になっても依然として続いていた。そこでは、書物は書き手と読み手との直接の交渉の可能な小世界でのみ流通するものとしての性格を残している。というのも、何よりもまず、書物を読む能力と余裕（時間的にも経済的にも）とを許された人間の数はきわめて限られていたからである。

著者と読者とは、書物をはさんで分化していたとはいえ、まだそれほど遠くへだたってはいなかった。この段階での書物は、経済的にはパトロナージュ、つまり特定の個人による出版への出資によって支えられていた。

「物を書くことによって名声を得ようと努力する人は、大衆の目にとまろうとしているのである。ところが、この大衆たるや、物質的快楽に耽溺したり、実務に没頭するひまはあっても、知的な楽しみにさく時間はないといった連中である」――十八世紀も後半になると、ジョンソン博士(注2)はこのように嘆かねばならなかった。読者にたいする彼の態度は、書物と人間との関係が最初の分化をなし、しかも小集団の規模にとどまっている段階の習慣によって支配されている。とともに、これを凌ぐべき大規模な分化のすでにはじまっていることも、ここでは示唆されている。(3) サミュエル・ジョンソンが感知し恐れているもの――それはパトロンにかわって書物の世界を支える読者公衆である。

十八世紀から十九世紀にかけて書物がこうむるのは、そうした変化である。書き手と読み手とのあいだの距離はますます遠いものになった。書物が誰のために書かれるのかが不明確になり、他方で、それを読む側も、それを書いた人間のことを直接には知らないということになる。二者のあいだで出版業者のはたす役割が重要になり、

書物は商品としての性格を強める。一方では、印刷技術の発展がもたらす大量でより正確な書物の生産、もう一方では、教育の普及と読書にさける余裕の増大――それでも、書物の値段は一般の労働者が手易く入手しうるほどに安くはならず、それには二十世紀の到来が必要であるのだが――とが書物の商品化を可能にしたのであった。

（富永茂樹「書物の近代」による）

（注）1　外山滋比古『近代読書論』からの引用。

2　ジョンソン博士――サミュエル・ジョンソン。十八世紀のイギリスを代表する詩人、批評家、随筆家（一七〇九～一七八四）。

問

(A)　||線部(イ)～(ハ)を漢字に改めよ。（ただし、楷書（かいしょ）で記すこと）

(B)　▌線部の読みを平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C)　――線部(1)について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項から選び、番号で答えよ。

1　聖書に書かれていること以外に、人間が世界を知る手段が昔は存在しなかったということ。

2　あらゆる知の源泉を聖書に限定し、他の書物から得るのを禁じていたということ。

3　聖書は人間の知そのものなので、一切の解釈を差し挟んではならなかったということ。

4　聖書以外の書物の存在が許されず、そこから得られる人間の知も必然的に聖書に一致していたということ。

5　人間の知のすべては唯一の書物たる聖書の記載に依拠しており、不足も超過もあり得なかったということ。

(D)　空欄 □ にはどのような言葉を補ったらよいか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1　音読から黙読へ　　2　大衆から個人へ　　3　音声から文字へ

4　前近代から近代へ　　5　写本から活字本へ

(E)　――線部(2)について。これとほぼ同じ内容を表している部分を本文中から抜き出し、十字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(F)　――線部(3)について。ジョンソン博士が読者公衆を恐れた理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　博士が直接知る大衆は、物質的快楽にひたり、知的楽しみに時間を割かないような者ばかりだったから。
2　博士の著作は、もともと少数の経済的に豊かで時間のある限られた読者層に向けられたものだったから。
3　読者が著者から遠ざかり、直接見知ることも交渉もできない捉えどころのない大衆に変貌したから。
4　書物と人間の間の分化が大規模化し、書物の非現実性がますます露呈するようになっていたから。
5　読者がパトロンから大衆になったことで、著者はますます多数の読者を獲得せざるを得なくなったから。

(G)　左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ　書物の世界は、もともと非現実的なものであり、近代的書物においてそれがいっそう明らかになった。
ロ　聖書が唯一の書物であった時代、それを読むという行為は公衆による集団的活動であり、独立した個人による読書とは異質のものだった。
ハ　近代以降、書物と知の間にすきまが生じたために書物の非現実性という事態が生じたのであり、それは是正されるべきである。
ニ　活字印刷による書物の普及は、近代的主体として個人が集団から自立することを促した。
ホ　読書の大衆化、著者と読者の分化によって書物の質が低下するため、間に立つ出版業者の役割が重要になる。

二　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（**解答**はすべて**解答用紙**に書くこと）

スポーツ競技は、日ごろわれわれが忘れている世界の「実相」をありありと示してくれる。すなわち、現実には厳密に「同じこと」は二度と生じないということ、しかも、その一回限りの出来事はいかに僅（わず）かな差異でも決して再現しないということである。

スピードスケートでは、選手たちは十分の一秒の差を競い合い、その結果によって勝敗が決まるが、レースが終わったあと、（タイムの修正はあるが）その走りは「あとで」修正できない事実として固定される。フィギュアスケートでも、（多少の評価点の揺れはあるが）あの時の手足の動きを「あとで」変えることはできない。絶対に一回限りの演技なのである。

サッカーでも、まさにキックする十分の一秒の差で、ある時はゴールが決まり、別のある時は決まらない。絶えず「もし、ああであったら、こうであったら」という後悔に咽（むせ）びながら、選手たちはその想定の無意味さを知っている。津波や崖崩れなどの自然災害でも、一秒の何分の一の差で、ある人は命を奪われ、ある人は助かるのである。

当たり前のことと思われるかもしれない。しかし、じつはここには哲学的に大層興味のある問題が潜んでいる。それは、「予測」とか「意志」とか「因果律」という言葉で表されるもの、すなわち現在と未来をつなぐ「糸」などまったくないのではないか、という疑いである。(1)「ある」のは現在だけではないのか？

過去は宇宙の果てまで探してもどこにも（脳の中にも）ないし、同じように、未来はどこにも（脳の中にも）僅かにもないのではないか？　しかし、人間はそれではひどく不安なので、過去と現在と未来とをつなぐ「一つの糸」という幻想を拵（こしら）えたのではないか？

だが、その幻想が一挙に破れる時がある。それは、私がある瞬間とっさに「そう」動いてしまった結果、途方もない違いが生じた時である。車で人を轢（ひ）いてしまった時、あるいは危機□でよけた時、車に撥（は）ね飛ばさ

れて大怪我をした時、あるいは危機［　　］で助かった時、誰にも（私自身にも）その時なぜ私がそう動いたのかはわからない。

哲学者は「可能世界」について議論することがある。現実の「この」世界に限定されず、それを取り囲む広大な世界のことである。読者の多くは、そんなものがあるのか、と思われるであろうが、可能世界はわれわれのごく普通の認識から自然に導かれるものなのだ。

その元祖はライプニッツ(注)であろう。彼は(2)真理に二種類あることに気付いた。一つは、1＋1＝2のような必然的にそう考えざるを得ない真理であり、その否定は矛盾になる（「理性の真理」）。だが、もう一つある。それは、空間が三次元であるとか、地球が太陽系の内側から三番目の惑星であるというような真理であり、その否定は矛盾ではない（「事実の真理」）。

後者に関しては、「論理的にはそうでないことも可能なのに、なぜ現実にこうなのか？」と問うと、なかなか答えられない。ここで、ライプニッツは「神の意志」を持ち出す。現実の世界が「ああ」ではなく「こう」であるのは、世界の開始に当たってそれ自体矛盾していない無数の可能世界のうち一つを神が選んだからであり、明日の出来事と今日の出来事が逆転しないのも、日々神が選んでいるからなのだ。

これを「形而上学」だと笑ってもいいが、われわれは現実の世界の外に可能世界を持ってこなければ、「なぜ現実にこうなのか」説明できない。なぜ地球に生命が誕生したのか、なぜローマ帝国は滅亡したのか、なぜ俺は何をやってもダメだったのか……答えようとすれば、ほとんど無限の可能性のうち最も蓋然性が高いものを選び出すという形で説明する以外ない。そして、このすべては観察や経験に基づいた知識ではない。煎じ詰めれば、(3)「そんな気がする」というお話にすぎないのである。

われわれは、膨大な可能世界のうちから一筋の現実世界を選びつつ現在に至ったというお話を紡ぎ出しているが、これは壮大な錯覚ではないだろうか？「もしこうだったら」という想定はすべて無意味ではないだろうか？可能性に留まったものなどまったくなく、世界とはただ現に生じたもの、そして現に生じつつあるものだけで

はないだろうか？

先に可能世界は「ない」と断言したが、じつは、偶然も必然も「ない」のである。「ない」とは、これらは世界の現実を表す言葉ではなく、ただ世界に対するわれわれの態度（期待、願望）を表す言葉であるということ。

偶然とは何か？　それは、古典的には、原因がないこと、あるいは原理的に発見できないことである。だが、新型インフルエンザが流行していても、天変地異が生じていても、その原因がない、あるいは原理的に発見できないということがあるだろうか？　ないのである。

にもかかわらず、依然としてわれわれは「偶然」という言葉を使う。それは、ある個人あるいは集団が与えられた状況において、目的に算入していないこと、反すること（多くは災い）が起こったときである。まさに偶然（アクシデント）とはことごとく自然法則に従った現象でありながら、われわれが望まなかったことにすぎないのだ。つまり、これは自然現象を記述する言葉なのではなくて、(4)世界に対するわれわれの態度を記述する言葉なのである。

そして、必然も「ない」。必然とは、古典的には、その否定が矛盾であるような現象である。すなわち、ある現象がそうである以外にないこと。物理法則がその典型であろう。明日の博多における日の出の時刻は、何時何分である以外にはない。これを中核にわれわれは「フランス革命」や「明治維新」などの歴史的事実がそうである以外になかったと思われるとき、「必然」という言葉を使う。だが、すべての事象は厳密には一度しか起こらないのだから、それがそうである以外になかったという判断をすることはできない。時間を戻して、もう一度「それ以外ない」ことを確かめることはできないからである。

そして、じつは(5)すべての自然現象もそうなのだ。すべての自然法則は「これまで」のデータから帰納法によって「これから」も妥当するという目論見（もくろみ）によって構築されたものである。しかし、どう考えてもその保証はない。明日からは自然法則がこれまでと異なっても、消滅しても一向に構わないのだ。

というわけで、じつは世界はただ「現にある」だけなのである。

（中島義道『非社交的社交性　大人になるということ』による）

（注）ライプニッツ――ドイツの哲学者、数学者（一六四六～一七一六）。

問

(A) ――線部(1)について。その具体的な説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　過去の事柄をいくら悔やんでも時間は巻き戻せない。
2　現在の事柄が未来の事柄を決定しているわけではない。
3　出来事の経緯を精密に観察しても不分明な部分が残る。
4　スポーツ競技などでタイムが出る瞬間は時間が止まる。
5　われわれは無意識のうちに現在の状況を選び取っている。

(B) 空欄 □ には、どのような言葉を補ったらよいか。漢字二字で答えよ。

(C) ――線部(2)について。二種類の真理に関する説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　理性の真理は事実の真理と違い固有の原理により規律される。
2　いずれの真理も究極的には神の意志が生み出したものである。
3　科学的探究はもっぱら理性の真理を明らかにするものである。
4　可能世界はもっぱら事実の真理を説明するためのものである。
5　いずれの真理も現実に反する想定を排除して成り立っている。

(D) ――線部(3)について。その具体的な説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 神の意志を持ち出す可能世界という発想は結局のところ形而上学に帰する。
2 可能世界が本当に神によって選ばれたものかを検証する観察手段はない。
3 明日の出来事と今日の出来事が逆転しないという保証も厳密には存在しない。
4 現実世界が無限の可能世界から選び取られたという想定は経験的根拠を欠く。
5 「もしこうだったら」という想定自体が錯覚である可能性も否定しきれない。

(E) ――線部(4)について。その具体的な説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 偶然とはわれわれが望まなかったという気持ちを表現したものにすぎない。
2 偶然も必然も物理法則に対するわれわれの不信感をあらわしている。
3 偶然とはわれわれが法則の探求をあきらめたところで生まれる概念である。
4 世界に対して科学的視点をとることによって偶然と必然とが区別される。
5 現実世界と異なる可能世界が無限にあるならすべての現象は偶然となる。

(F) ――線部(5)について。その具体的な説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 自然法則の一部が反証されれば、結局はすべての自然法則が崩壊する。
2 歴史的事実という過去だけでなく、未来もまた法則的には決定されない。
3 歴史的事実と同様、自然現象もまた厳密には法則性を検証しえない。
4 自然法則も原理的には歴史的事実のもつ必然性と同様に反証されうる。
5 いかなる自然法則も不確実な帰納法によって構築すべきではない。

(G) 左記各項のうち、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ スポーツ競技は因果律などないことをわれわれに気づかせる契機となりうる。

ロ 予測や因果律がわれわれの幻想にすぎないのに対し、意志は現在と未来を結びつける。

ハ 原因がないことなどありえない以上、偶然の古典的な定義に基づくなら、そもそも偶然は存在しえない。

ニ すべての法則はその永続性に疑いがあるから安易に使用すべきではない。

ホ 結局のところ、過去も未来も人間の作り出した幻想にすぎない。

三　左の文章は、様々な種類のくもを取り上げ、くもの諸相について論評したものである。これを読んで後の設問に答えよ。（**解答**はすべて**解答用紙**に書くこと）

血気の袖どち、むれつつ話す夜、「百物語すればおそろしき事ありと言ふ。(1)いざせん」と、(2)せちに話すに、はや九十九におよぶ。「よしさら(注1)、まづ三寸(注2)くみてよ。(a)事せくな(3)」など言ひて、順盃(注3)とりどり色めいて侍るに、ひとり立ちて重(注4)のさかなたづさへて円居(注5)のこらず末座までひきまはりしに、そのとき「ここへもひとつ」とて、おほきなる手を天井よりさしだす。はやきものありて、抜き打ちに切る。手ごたへなうして糸なんど切るがごとし。落つるを見るに、くもの手三寸ばかり切りたり。「(4)さてこそ百の話のしるしありけれ」と語る。(5)まことにおそろしき虫にあらずや。

(6)鬼ぐもの名におひて、上蔦(注6)ぐものこび過ぎたるも、げに穴ぐもの深きたくみやあらん。土ぐもの土気にも見こ(注7)なせど、また青ぐもの草にまじりては、大象をも殺す、おそろしき毒ともなれり。汀の風もさえわたり、浪にうき藻のよるひるとなく、(7)ただ水ぐものあはれなるは、心も糸も乱すらんと見るに、かしこくも身じまひして、平屋の家か平ぐもの(注8)、間口にせばう作りなし、壁にむかへる殊勝さは、(b)かの少室(注9)のよるべとや言はん。

なほ、はへとりぐもよ、夏の昼寝のとのゐともたのまん。(9)ただかき乱したる心もほどけて、おのが糸筋すなほならば、一葉(注10)の舟のためしにものらなん。何とてか、わがせこ(注11)が来べきよい事にはひかれずして、童子が霊となりては、頼光(注12)にも近づきしぞや。(c)いまはた、ちまたに殺されても、わらはべなどの(10)「をととひ来よ」と呼ぶも、その性、執心の深ければこそ。

（『御伽物語』による）

（注）
1　よしさら――「よしさらば」の意。ままよ。ともかくも。
2　三寸――御酒。酒の美称。
3　順盃――酒盃を順次にまわして酒を飲むこと。
4　重――重箱。

5　円居――集まってまるく居並ぶこと。団欒（だんらん）。

6　上臈ぐも――コガネグモ科のクモ。ジョロウグモ。

7　見こなせど――見くびるがの意。

8　平ぐも――ヒラタグモ科のクモ。塀や壁などに丸くて平たい巣をつくる。「壁銭」「壁鏡」の字をあてる。

9　少室――中国河南省にある少室峰。ここの少林寺で、達磨大師が壁に向かって九年坐禅を続け、悟りを得たという。

10　一葉の舟のためし――中国の貨狄（かてき）が、くもが柳の一葉に乗るのを見て、まねて舟を造って黄帝に献上したという伝説をさす。

11　わがせこが来べき――「我が背子が来べき宵なりささがねの蜘蛛の行ひ今宵著（しる）しも」（『日本書紀』允恭紀）という弟姫（衣通姫）の歌による。

12　頼光――源頼光。平安中期の武将。酒呑童子討伐や土蜘蛛退治の説話で知られる。

問

(A)　――線部(1)の現代語訳を七字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(B)　――線部(2)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　ひたすらに　2　ぬけめなく　3　楽しげに　4　すこしずつ　5　ただちに

(C)　――線部(3)の意味として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　邪魔するな　2　さわぐな　3　おどろくな　4　間違えるな　5　あわてるな

(D)　――線部(4)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1　やはり百物語をした罰があたった

2　やはり百物語に記されたとおりになった

3　やはり百物語の怪異のあかしがあった

4　やっと百の物語ができあがった

5　やっと百の物語を記し終わった

(E) ――線部(5)の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 くもは本当にこわい虫ではないか
2 くもは本当に畏れ多い虫ではないか
3 くもを本当に不気味な虫だとは思わなかったのか
4 くもは本当はおそるべき虫ではないのではないか
5 くもは本当はたいした虫ではないのだなあ

(F) ――線部(6)の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 鬼ぐもはその名のようにおそろしく
2 鬼ぐもはその名に負い目を感じていて
3 鬼ぐもという名は美しく洒落ていて
4 鬼ぐもという名に似つかわしくなく
5 鬼ぐもという名の誇りにかけて

(G) ――線部(7)は掛詞である。何と何が掛けられているか、それぞれ漢字で記せ。(ただし、楷書(かいしょ)で記すこと)

(H) ――線部(8)について。筆者はなぜこのように言うのか。その理由として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、番号で答えよ。

1 壁と向きあう平ぐもの様子は立派に見えるが、心の中は乱れていて、少室の達磨大師とは実は異なるから
2 平ぐもが平屋に巣を作るために懸命に壁と向きあうのは、立派な少室の達磨大師を手本にしているから
3 平ぐもはひたすら壁に巣を作ることしかできず、立派な少室の達磨大師を少しは見習うべきであるから
4 こぢんまりと巣を作り、実直そうに壁と向きあう平ぐもの様子は、少室の達磨大師を思わせて立派だから
5 平屋を作り、さらに壁作りにも挑む平ぐもは、少室の達磨大師に並ぶほど忍耐強くて立派だから

(I) ――線部(9)を漢字二字で記せ。(ただし、楷書(かいしょ)で記すこと)

(J) ――線部⑽について。童がそうするのはなぜか。左記各項の中から最も適当なもの一つを選び、番号で答えよ。

1 くものこだわりのある性質が好ましいから
2 くもの執念深い性質を嫌っているから
3 どうにかしてくもに生き返ってほしいから
4 にくらしいくもを何匹も退治したいから
5 くもに強く心を引かれているから

(K) ═══線部(a)～(c)の文法上の意味として最も適当なものを、左記各項の中から一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

1 可能　2 受身　3 過去　4 完了　5 存続

(L) 左記各項のうち、本文の内容に合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 血気さかんな者たちが意気揚々と百物語をしたが、怪異のおそろしさに驚きあわてた。
ロ 天井から出てきた妖怪の手を切り損じ、誤ってくもの手を三寸ばかり切り落とした。
ハ 上臈ぐもが艶めかしくふるまうのは、穴ぐもの計略にはまり騙(だま)されているからである。
ニ 青ぐもの毒は大象をすら殺してしまうのであるから、くもを見くびってはならない。
ホ 水ぐもが心穏やかに趣深い様子でいるのは、波に揺られるまま自由に生きているからである。